巻　頭　言

北海道算数数学教育会
高等学校部会長　中　西　勝　範
（北海道札幌啓成高等学校長）

第39回北海道高等学校数学コンテストが、道内16校、215名の参加（244名申込）により、令和３年（2021年）１月９日（土）を「標準実施日」として、全道各地の高校で実施されました。今年度は、新型コロナウイルス感染症の感染状況を踏まえ、公開会場を設けず、参加する生徒が在籍する高校の先生のご協力を得て、各高校を会場として実施していただきました。協力していただいた先生方に心から感謝申し上げます。また、果敢にチャレンジしてくれた生徒の皆さん、ありがとうございました。そして、数学コンテストの企画・運営、問題作成、採点、講評作成とともに、未曾有のコロナ禍においても、これまで脈々と灯し続けてきた数学コンテストの灯を絶やさないように、実施方法の検討や連絡・調整をしていただいた代数解析研究会の先生方に感謝いたします。

初めて出会った５つの問題との３時間半の闘いから約２か月が経ち、自分の答案を手元にして、参加した皆さんは、問題と長時間格闘した感覚がよみがえってきたことと思います。あの「考える時間」「試行錯誤する時間」があったからこそ、「解答・解説」や自分の答案を見ると、インスパイアーが起こるのです。本来なら、表彰式の際に、今回の問題の作成者と受賞者とのコミュニケーションの場があり、さらなるインスパイアーが起こるはずでしたが、昨年度に続き、その場がないことは残念です。

さて、数学コンテストの問題は、暗記した知識や解法、ましてや、テクニックを問うものではありません。ですから、皆さんは、「How to」を当てはめられない問題に対して、これまでの学習内容を総動員し、方針を立て、挑み、つまずき、軌道修正し、さらに挑むことで、ようやく答えにたどり着くことができたことと思います。ですから、解けたときの満足感は格別だったでしょう。逆に、あと一歩で解けなかったり、全く歯が立たなかった問題もあったかもしれません。その場合、解答や解説を『数学のいずみ』で確認し、悔しさがさらに強くなったり、解答例の発想や美しさに感動したことでしょう。つまり、数学コンテストは、問題に奮闘している最中と終了後の両方で、感動させてくれるのです。そして、その感動こそが、次の学びへの原動力なのです。

ですから、数学コンテストに参加した皆さんが、このことをきっかけとして、これまで以上に数学に興味・関心を持ち、主体的に数学を学び、数学の面白さや奥深さを実感してくれることが、私たち数学教育に携わる者の一番の願いです。そして、皆さんには、数学そのものを研究したり、数学の考え方を活用し、将来、社会で活躍する人になってほしいのです。

数学コンテストを長くご支援いただいている秋山仁先生は、数学の目標として、「物事を筋道立てて考える」（論理的思考力）、「複雑な事柄を分類・整理し、真実を見抜く」（分析能力）、「データや観察資料を基に、結論を予測したり、結果を推理できる」（推理能力）、「いろいろな面で、真実と嘘を見極められる」（判断力）を挙げています。「数学の考え方を活用し、将来、社会で活躍する人になってほしい」というのは、まさに、この力を付けて活用してほしいということであり、文系と理系の区別はありません。

これからの世の中では、自らの素養を高めつつ、自ら課題を発見し、納得解や最適解を導く力が求められます。先ほどの「数学の目標」は、「素養」の一つです。ですから、皆さんは、今回味わった数学のよさを吸収するとともに、コンテストと格闘し、その後、振り返った（自己評価した）経験を、様々な社会課題の解決に生かしてください。

結びに、数学コンテストの実施に当たり、ご後援いただいた北海道教育委員会、札幌市教育委員会、北海道新聞社、北海道高等学校長協会の皆様、また、ご協賛くださいました東京書籍株式会社、株式会社新興出版社啓林館、数研出版株式会社、北海道情報大学、現役予備校TANJIの皆様に、厚くお礼と感謝を申し上げます。